15. 歩行空間のデザイン

15.1 ペデ・スペースのネットワーク

すでに9.4で述べたように，歩行者専用路（ペデ）はこのキャンパスの基幹的な空間であるだけでなく，建築の位置，方向性，道路のルートや規格などを決定してゆく時の基準となるものである。とくにメイン・ペデは，マスター・プランにおいて最優先で決定されたものである。

ペデ・スペースは，このメイン・ペデを基軸にして，そのまわりに配置される建築や運動施設，さらにループ道路に設けられるバス停をつなぐようにネットワーク化される。また，特に目的となる施設がなくても，林や池のような，環境そのものを楽しむための散策路も数多くつくられている。**Fig. 15.1.1**は，実際に建設された多様な歩行空間をまとめたもので，初期の計画案である。**Fig. 9.4.1**と比較対照されたい。これからも明らかなように，道路（自動車用）とは異り，ペデは非常に多様な表情をもち，大小の広場をそのネットワークに含んでこまかく変化しつつ全体の構造をつくり上げていることがわかる。

Fig. 15.1.1　ペデ・ネットワーク図（現在）

15.2 一の矢ペデ

設計　小野敬也

一の矢ペデは，メイン・ペデのうちの，中央広場の北端から，一の矢学生住宅地の南端にある一の矢生活センターまでの，延長約750メートルの部分を呼ぶ愛称である。この区間は，ペデに沿って建つ建築は全くなく，ほぼ全区間，自然的環境のなかを，アカデミック・コアからゆっくりと住宅地へ向うルートである。

歩いて750メートルという距離はかなり長いため，平均して50メートル程度の間隔ごとに，変化をつけるための空間的な仕かけを用意しているが，中でも大きな変化地点は，道路を立体交差で越す橋（群鷺橋）の部分と，兵太郎池に接する，テラスを持つ部分とである。前者は，地表面から5メートル高く，しかも正面に筑波山を眺める眺望点であり，後者は西に長くのびる兵太郎池を望み，水面に向って階段状に下りていくテラスである。このペデには，サトザクラやレンギョウを中心とした，多様な花木が植栽されており，キャンパスでもきわめて自然度の高い，落付きのある歩行空間になっている。

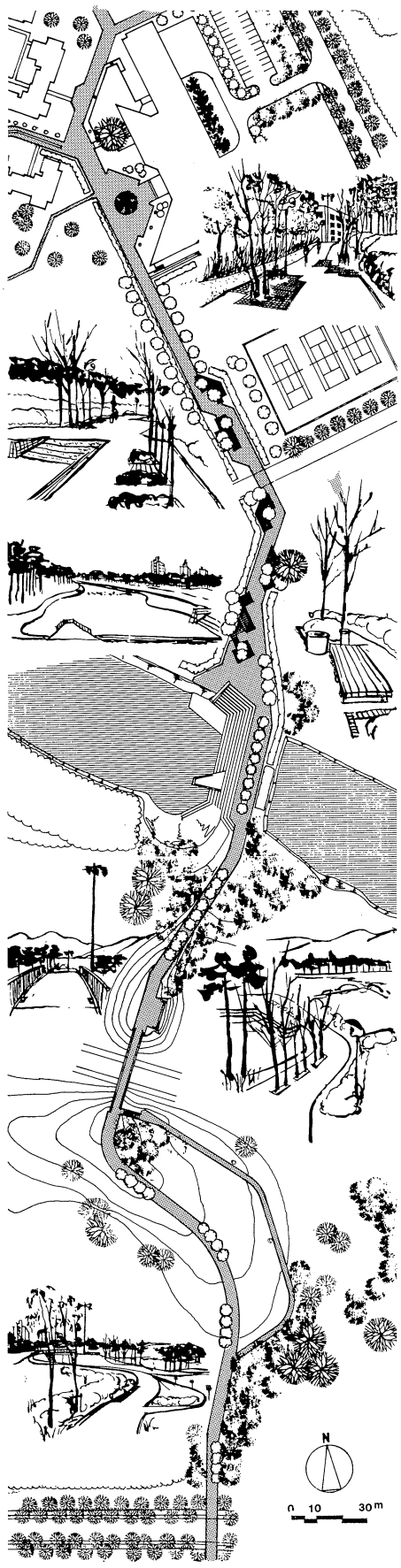


Fig. 15.2.1　一ノ矢ペデ平面図

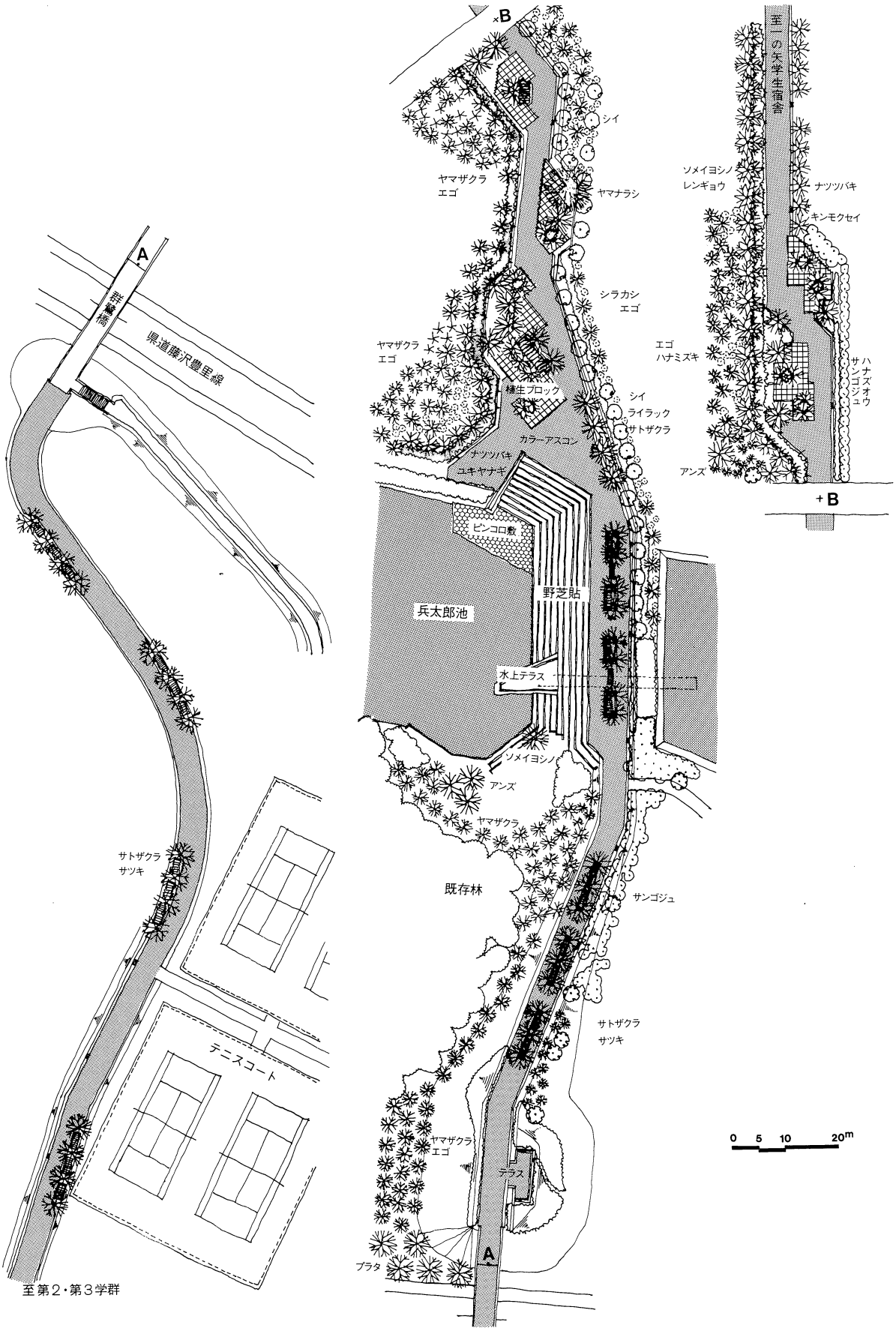


Fig. 15.2.2 一ノ矢ペデ部分詳細図

15.3 体芸ペデ

設計　土肥博至
　　堀内春夫

体芸ペデは，メイン・ペデに直交する，サブ・ペデの中ではもっとも大がかりなものであり，キャンパスで最初につくられたペデでもある。全長700メートル，ループ道路の西のバス停から，東は学外の東大通りのバス停まで，ほぼ直線のルートで，体育部門および芸術部門の主要な施設は，すべてこのペデに，2階レベルで接続されている。

このペデは，主要部が完全な架構形式によるいわゆるペデストリアン・デッキであり，その下部空間は，道路や共同溝，パーキングスペースに使われている。そのため，このルートはアップ・ダウンがなく，地表面とは階段のほか，4ケ所に設けられたスロープで接続される。この方式は極めて高価につくため，これ以後はほとんど用いられず，バンク形式のペデが一般的となった。

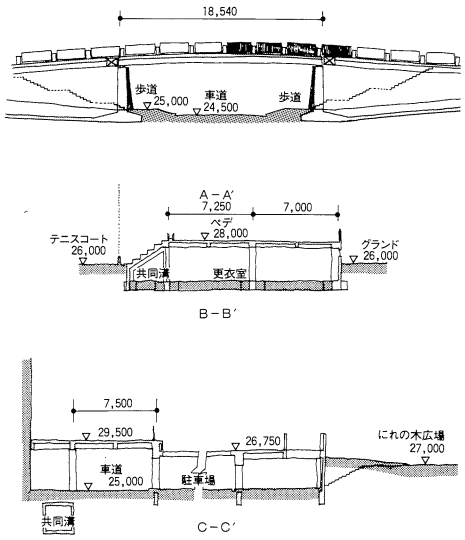


Fig. 15.3.2　体芸ペデ断面図

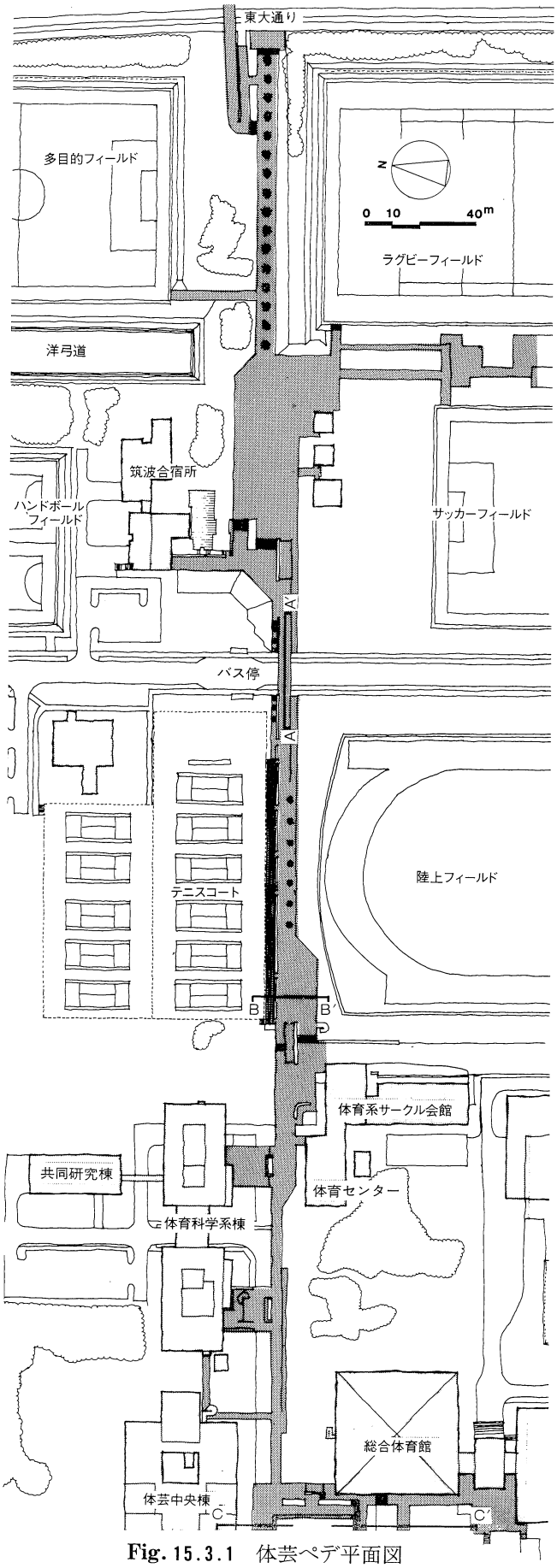


Fig. 15.3.1　体芸ペデ平面図

15.4 天久保ペデ　　設計　土肥博至

メイン・ペデのうち，南部アカデミック・コアから，平砂学生住宅地までの区間を天久保ペデと呼ぶ。南部コアの2階のレベルから南へ，ゆっくりとスロープを下って，2つの人工丘の間を通り抜けると，天久保池を東西に分ける橋に出る。ここからは，両サイドの池面を通して雄大な景観がひろがっている。ルートは橋を渡るとこまかく屈曲して小さな林を通り抜け，ループ道路との交差点に出る。ここは平面交差だが，歩行者の横断を優先させるため，ループ道路の両側に，減速のためのハンプが設けられている。これを渡ると厚い松林に入って約100メートル，林を出ると平砂の住宅地であり，間もなく，生活センター前の広場に到達する。この間約5分である。このルートは，学生に最も好まれるもののひとつとなっている。

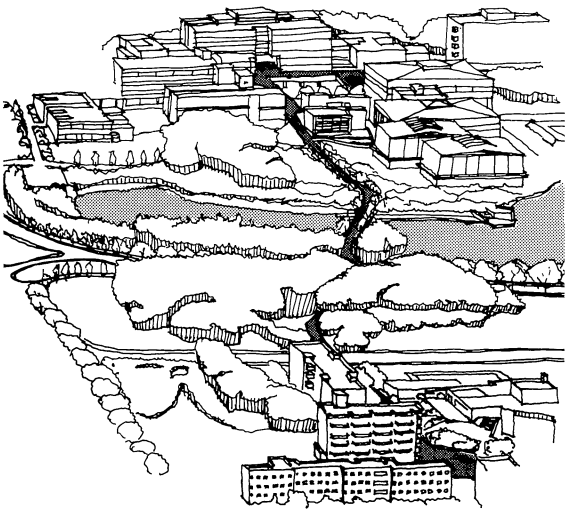


Fig. 15.4.2　天久保ペデ鳥かん図

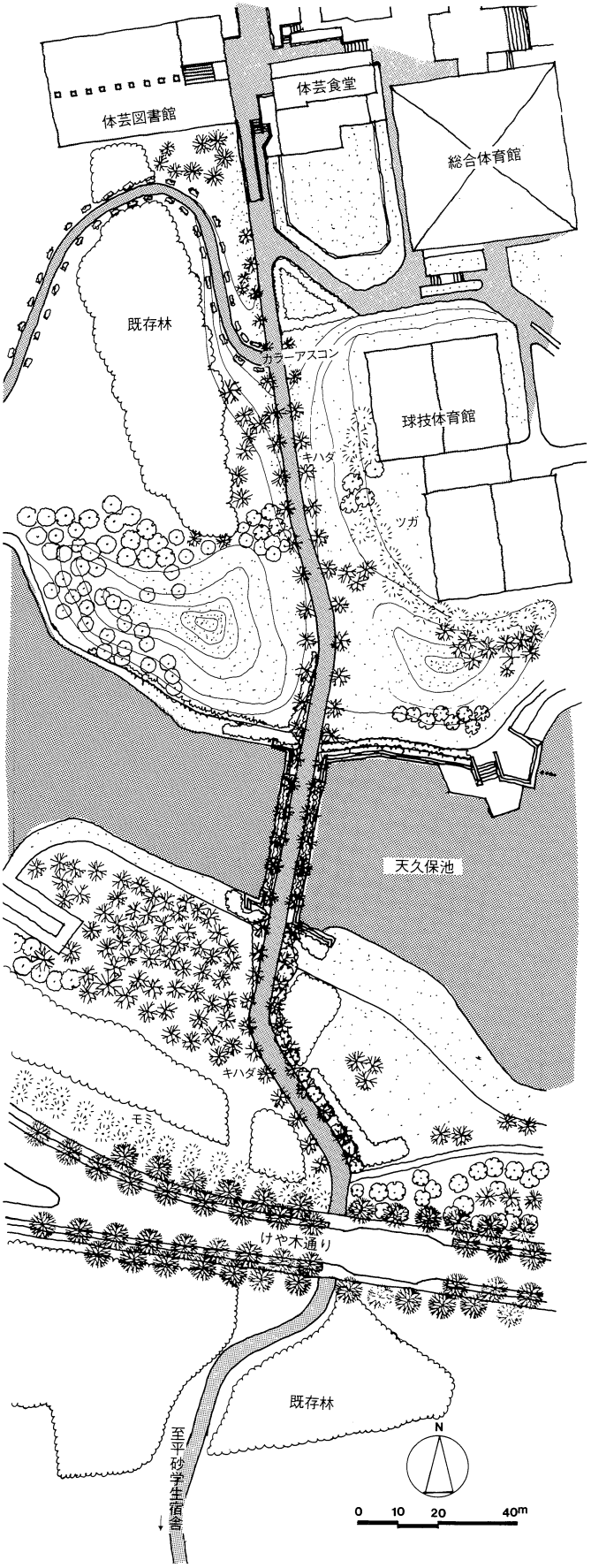


Fig. 15.4.1　天久保ペデ平面図

15.5 サブ・ペデの数例

以上述べたスケールの大きなペデ空間以外に，無数ともいえる小規模な，または特殊な用途のペデ・スペースがつくり出されている。ここではそのいくつかを紹介するが，**Fig. 15.5.1**は，グランド地区の中の，休息の場を兼ねた，モール風のペデで，レンガでペーブされ，水呑やベンチが置かれている。**Fig. 15.5.2**は，いくつかの体育館とグランドを結ぶルート状のペデで，車のアプローチとパラレルにデザインされたもの，**Fig. 15.5.3**は，医学地区の食堂棟前の空間で，ふたつのバス停を結びながら運動施設へもサービスする末端のペデである。**Fig. 15.5.4**は，既存の松林の中に設けられた散歩道で，巾員は2メートル程度，一切樹木を伐らないために，工事機械を使わずに施工されたものであり，森林の気を味うことができる。

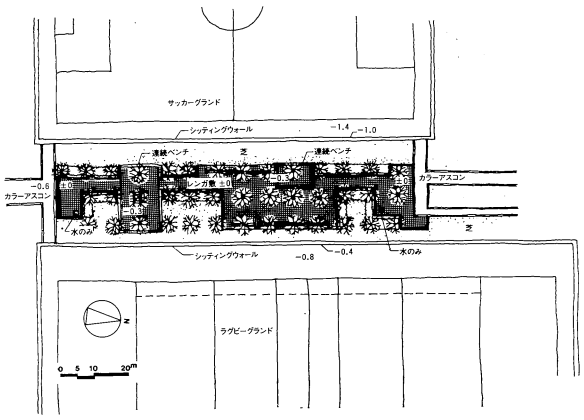


Fig. 15.1.1　グランド中央ペデ設計図

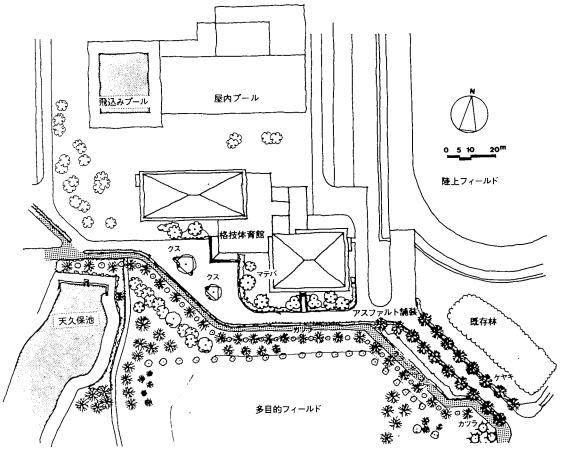


Fig. 15.5.2　体育館地区ペデ設計図

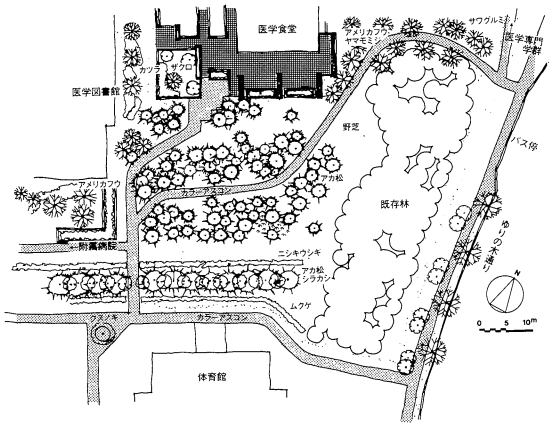


Fig. 15.5.3　医学食堂ペデ設計図

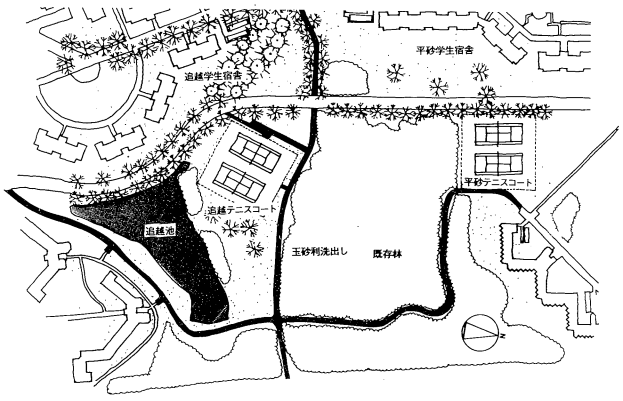
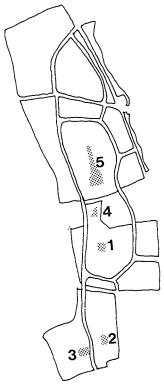


Fig. 15.5.4　追越地区森の小径設計図



15.6 広場のデザイン

現代都市に広場を，というのは多分あらゆるアーバン・デザイナーにとって切なる願望であり，容易に果たせぬ夢でもある。ヨーロッパ都市文明の中に生まれたこの珠玉の都市空間は，時空を超えてわれわれを強く魅惑するのである。しかし，わが国の歴史を通じて都市生活の多元的な舞台はみち空間だったのであり，たまたま広場的空間が出現する場合にも，それは固定的装置によるものではなく，あくまでもイベント的空間であり，櫓や仮設舞台，引き店やかがり火によって一時的に出現されるソフトな空間であった。

一方，空間の分割所有と専有化，公と私の分離と多様な戸外空間機能の私空間への取り込み，これらと並行して促進される残されたわずかな公空間に対する運営責任の分裂と管理の優越，といった現代管理社会の状況の中で，もっとも総合的で多元的な空間であるプロト・タイプとしての広場をつくり出すことは不可能であろう。現代がわれわれに与えてくれるのは，建築がそうであるのと同様に，ショッピング広場や交通広場，ポケット・パークやスポーツ広場といった機能別の空間であって広場ではない。むしろ，利用者が比較的特定されるコミュニティ広場のほうが，個人のそれへの帰属感を生み，個々の生活空間の一部に転化しやすく，その管理を共有化してちょっとした仕掛けや装置でその演出性を高め得る可能性があるように思われる。それはもはや形態的な意味では広場と遠い存在ではあるが，その現代における正当な後継者と認めざるを得ないのである。

筑波大学における広場は，以上のふたつの観点，すなわちみち空間の優位性の確認とコミュニティ広場としての認識を基調にして，生活環境の一部としての手近で帰属性を明示し，独立した空間というよりほかの要素（ペデ，建築，緑地など）と呼応するべきものとして構成された。そのデザインの基本方針はつぎのとおりである。

1. キャンパスにおける日常的な生活空間としての各ゾーンに１～２カ所の広場を配置し，ゾーンのアイデンティティを高める。
2. すべての広場はみちとしてのペデと関係づけ，一体化する方向で配置する。
3. 広場には最低の条件として車を入れない。
4. 各広場を個性化するために，シンボルとなる仕掛けを用意する。
5. 学園祭，各種の集会などのイベントのための演出性をもたせる。
6. 広場デザインにおける伝統的な指標，高さ・奥行比や間口・奥行比などは決定的な条件とは考えない。
7. 地表面の高さや勾配に変化をもたせる。
8. 床の仕上げを重視して自然の素材を使用し，屋外生活の焦点としての意味をもたせる。
9. ベンチなどの固定的で，あからさまな装置を置くことは避け，滞留には階段や花壇の縁石などを自由に選択できるように考える。
10. 広場の設計は周囲の建物の設計に先行して行い，建築設計の設計条件として作用させるが，それによっ

て必要な修正を加え，工事は建物と一体的に行う。

ニレの広場 Fig. 15.6.1（設計　土肥博至）

キャンパスで最初につくられたこの広場は，南アカデミック・コア（体育・芸術地区）の中心として，体芸中央棟，芸術学群棟，体芸図書館，南地区食堂，総合体育館の各建築を周囲に配している。広場西側をメインペデが，東側をサブペデが通過し，メインペデからはサンクさせて，南方向に勾配をもたせた芝生と煉瓦敷きの広場のシンボルは12本のアキニレの樹である。この地区の全体的に固く無機的な建築と架構ペデの中で，柔らかく自然を象徴した空間が意図された。

池の広場 Fig. 12.3.4（設計　岡田新一）

南・北両コアの接続点に位置するこの広場は思いきってルーズでインフォーマルな空間であり，松美上池をそのシンボルとして扇状に展開し，そのバック・スクリーンとして第1学群の各建築が配置された。ここで得られる大きな視界と広場を貫通するメインペデの組合せはキャンパスでもっとも成功したケースと考えられる。

中央広場 Fig. 15.6.5（設計　土肥博至・小野敬也）

大規模な中央広場は，デザイン・モチーフによって，南半分を石の広場，北半分を流れの広場と呼ぶ。南半の周囲を統一されたデザインの建築で完全に囲んだオーソドックスでフォーマルで，意識的に無機的表現を狙ったこの広場は，大学全体の象徴的空間であり，中央図書館，文科系の学系棟および大学院棟を配している。ペデ・レベルから1 m下げたフラットな床は土地の産であるミカゲを敷いて平面的なこの広場のシンボルとしている。

北半分の，第2学群と第3学群とにはさまれたモール状の広場は，そっくりそのままメイン・ペデであり，いわばペデの広場化されたものである。両側の建物はその高さ，壁面位置，広場レベルの表情，開口部，外壁材料など，すべて広場の一部として計算された。ダブルになったメイン・ペデの間を流れる長さ200 mの水路がシンボルである。この両広場をつなぐ部分には滝の広場が計画されているが，現在は未完で芝生の斜面になっている。

半円の広場 Fig. 15.6.2（設計　岡野　真）

この広場は，追越学生住宅地の中心に，メイン・ペデを受けとめ，そして軸をずらせて流すためにデザインされた。この半円は，その東側を5棟の住棟で囲むことによって完成されており，広場自体は，中心部に向ってスリ鉢状の芝生スペースからできており，樹木等の余計なものは一切排除している。

医学の広場 Fig. 15.6.3（設計　土肥博至）

医学コアの中心空間としての広場はメイン・ペデ・ルートから外れていることもあって，ほかの広場のようにフィジカルな個性の強調よりも細かな表情のデザインによって，独立性の高い落ち着いたスペースを意

図したもので，周囲の建物は医学学群棟，医学学系棟，医学図書館，医学食堂などである。

大学会館広場 Fig. 15.6.4（設計　槇　文彦）

ユニークな石柱を中心にもつこの広場は，周辺が2階レベルで中央が1階レベルのすり鉢状の空間であり，中心に向って階段状に下ってくる単純な構成であるが，学内でもっとも囲まれた広場である。

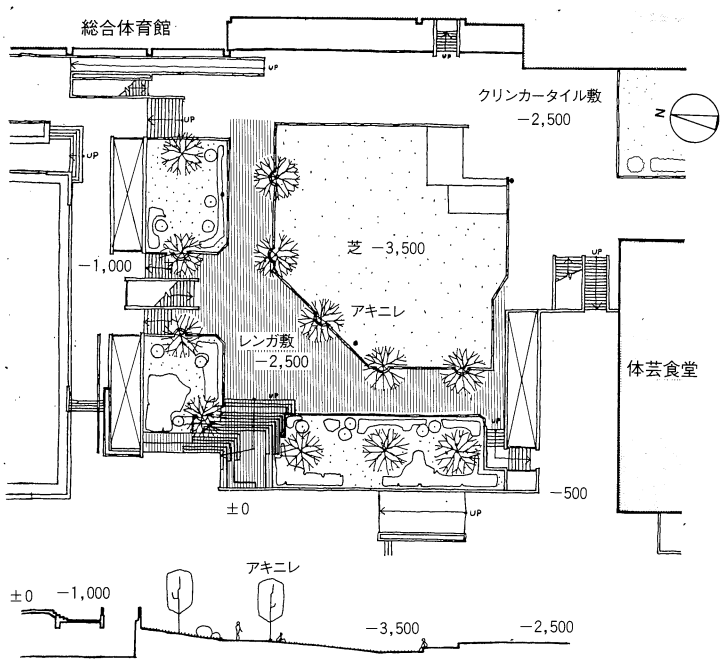


Fig. 15.6.1　ニレの広場設計図

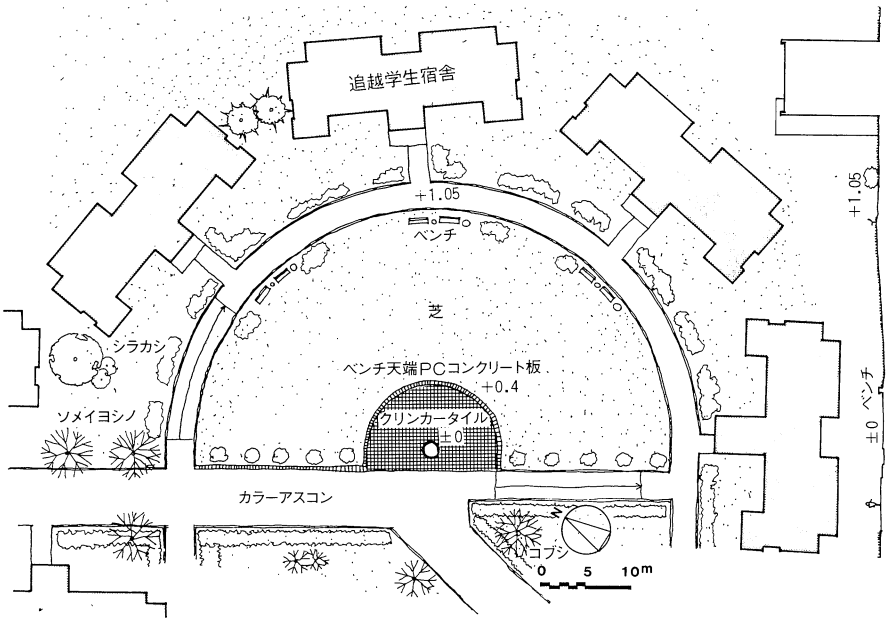
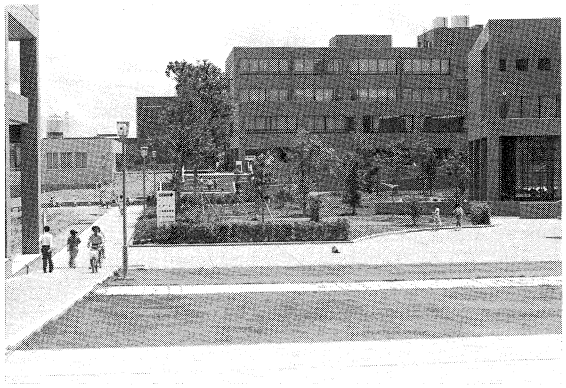
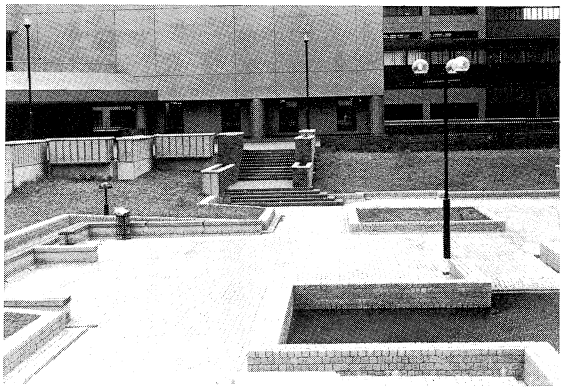


Fig. 15.6.2　半円の広場設計図





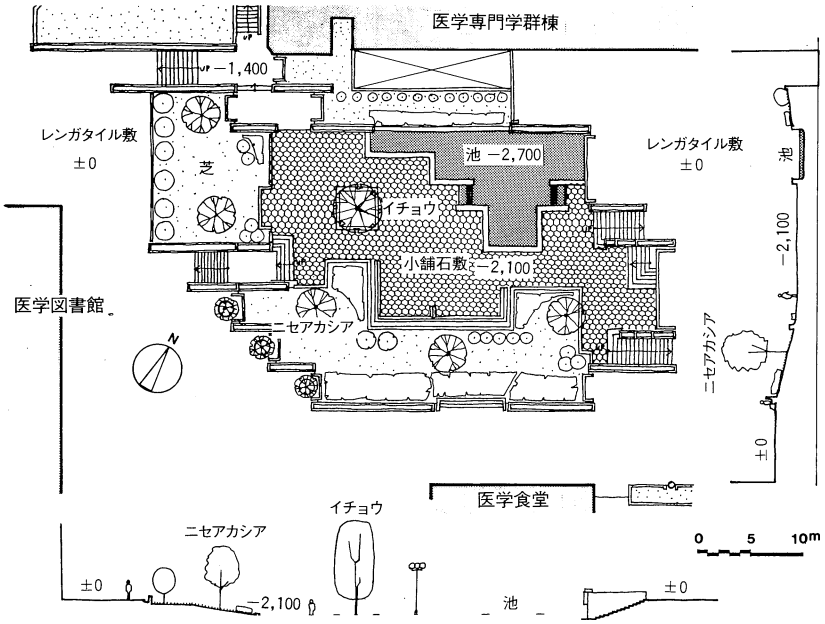


Fig. 15.6.3 医学地区広場設計図

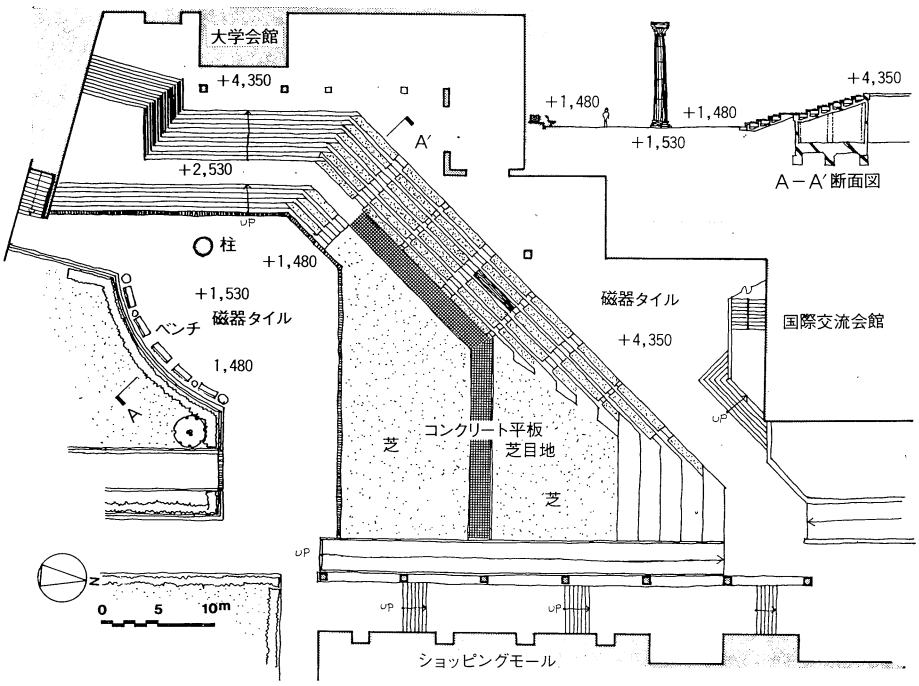


Fig. 15.6.4 大学会館広場設計図

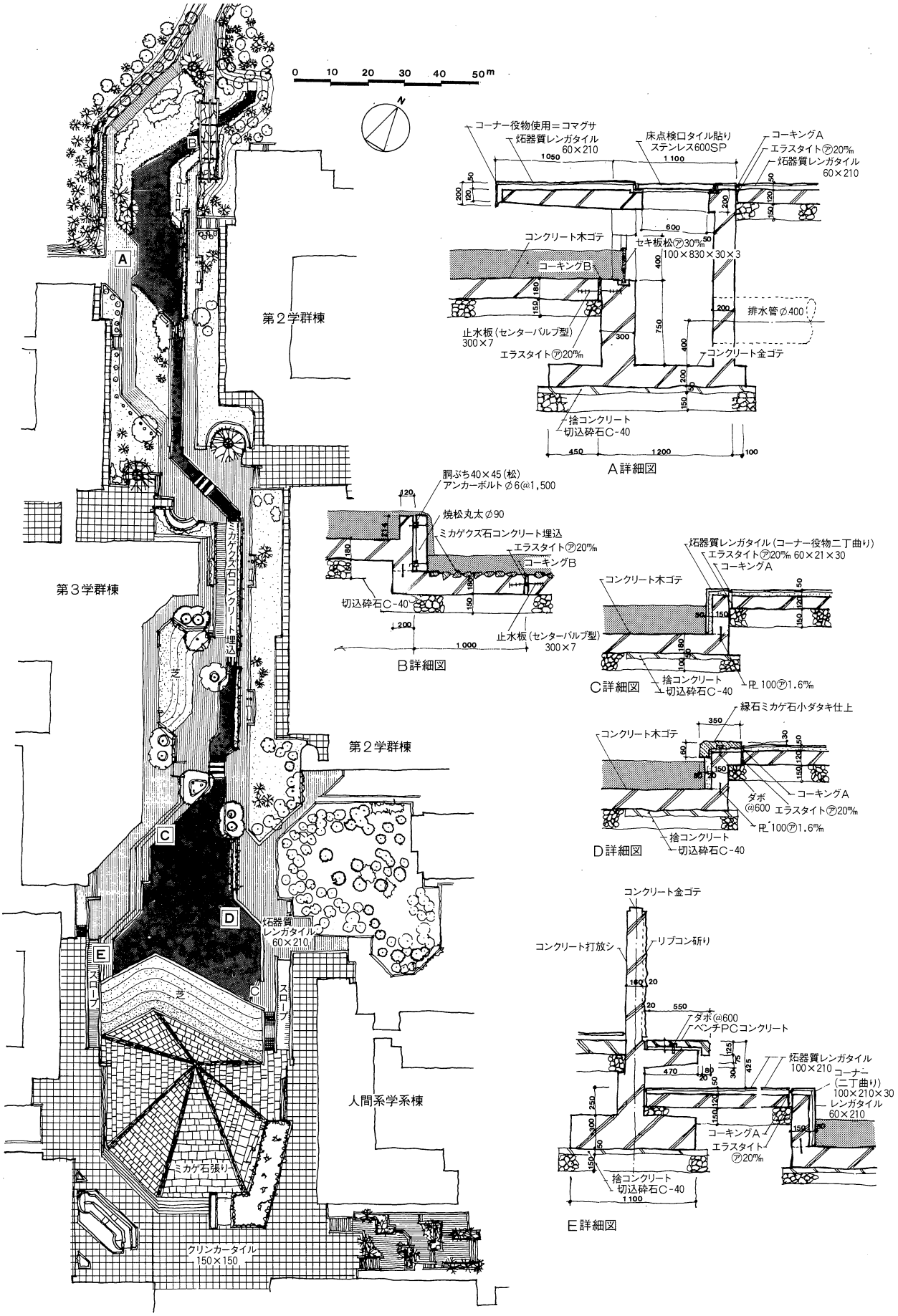


Fig. 15.6.5 中央広場設計図